

第 1 週間 火曜日

早 課

第 10 カフィズマ

第 1 段、第 70-71 聖詠

しゅ われなんじ たの ねが われよよ はじ え なんじ ぎ よ われ たす われ まぬが
主よ、我爾を恃む、願はくは我世に羞を得ざらん。爾の義に縁りて我を援け、我を免れし

め なんじ みみ われ かたぶ われ すく たま わ ため けんご かくれが われ つね かく え
め、爾の耳を我に傾けて我を救ひ給へ。我が爲に堅固なる避所となりて、我に常に隠るを得

しめ給へ、爾我を救はんことを命ぜり、蓋爾は我が防固、我が能力なり。我が神よ、我を悪者

て たま なんじわれ すく めい けだしなんじ われ かため わ ちから わ かみ われ あくしゃ
の手より、不法者及び迫害者の手より救ひ給へ、蓋主神よ、爾は私の望なり、我が幼き

より私の恃なり。我娠まるる時より爾に護られ、爾我を母の腹より出せり、我爾を讃め揚

げて息めざらん。多くの者の爲に我奇怪の如き者となれり、然れども爾は私の堅き望なり。願

はくは我が口は讚美に満てられて、我爾の光榮を歌ひ、日に爾の威嚴を歌はん。我が老ゆ

るとき我を棄つる母れ、我が力衰ふる時我を遺す母れ、蓋我が敵は我を論じ、我が靈を伺

ふ者は相謀りて云う、神は彼を棄てたり、追ひて彼を拘へよ、救ふ者なければなり。神よ、我に

遠ざかる母れ、我が神よ、速に我を助け給へ。我が靈に仇する者は。願はくは辱しめら

れて消えん、我を害せんと謀る者は、願はくは辱と侮とを被らん。唯我常に爾を恃み、

ますますなんじ ほ あ わ くち なんじ ぎ つた ひび なんじ おん つた けだしわれそのかず し
倍爾を讃め揚げん。我が口は爾の義を傳へ、日に爾の恩を傳へん、蓋我其數を知らず。

われしゅかみ のうりよく おも なんじ ぎ ひとりなんじ ぎ きおく かみ なんじ わ いとけな われ おし
我主神の能力を思ひ、爾の義、獨爾の義を記憶せん。神よ、爾は我が幼きより我を晦へ

たま われいま いた なんじ きせき つた かみ としお かみしろ われ す われ なんじ
給へり、我今に至るまで爾の奇蹟を傳ふ。神よ、歳老い髪白きまで我を棄てずして、我が爾の

のうりよく こ よ なんじ けんう およ しょうらい もの つた およ かみ なんじ ぎ きわ たか
能力を此の世に、爾の權能を凡そ將來の者に傳ふるに迨べ。神よ、爾の義は極めて高し、

なんじおおい こと おこな かみ たれ なんじ たくら え なんじ おお かつはげ くらん われ つかわ
爾大なる事を行へり、神よ、孰か爾に比ぶるを得ん。爾は多く且厲しき苦難を我に遣せ

しか またわれ い またわれ ち ふち ひ いた なんじわれ あ われ なぐさ われ ち
り、然れども復我を生かし、復我を地の淵より引き出せり。爾我を擧げ、我を慰め、我を地の

ふち ひ いた わ かみ われきん もつ なんじ なんじ しんじつ さんえい せい もの
淵より引き出せり。我が神よ、我琴を以て爾と爾の眞實とを讃榮せん、イズライリの聖なる者

われしつ もつ なんじ さんしょう われなんじ うた としわ くち よろこ なんじ すく わ たましい よろこ
よ、我瑟を以て爾を讃頌せん。我爾に歌ふ時我が口は喜び、爾が救ひし我が靈も喜ぶ。

わ した ひび なんじ ぎ つた けだしわれ がい はか もの はじ こうむ はずかしめ う
我が舌は日に爾の義を傳へん、蓋我を害せんと謀る者は耻を被り、辱を受けたり。

誦經 光榮は父と子と聖神に歸す。

(詠) 今も何時も世々に、「アミン」

ア ril イヤ、ア ril イヤ、ア ril イヤ、神よ、光榮は爾に歸す。(三次)

主憐めよ。(三次) 光榮は父と子と聖神^oに歸す。

誦經者の「光榮は」に続いて

今も 何時も 世々に アミン ア ril イヤ、ア ril イヤ ア ril イヤ
3回
神よ光榮は なんじに 歸す 主 憐れめ 主 憐れめ 主 憐れめよ、
光榮は 父と子と 聖神に 歸す 誦經者の「今も」に続く

誦經 今も何時も世々に、「アミン」。

第2段 第72-73聖詠

かみ なん じん こころ きよ もの じんじ ただわれ わ あしほと つまづ わ あゆみほと
神は何ぞイズライリ人に、心の淨き者に仁慈なる。唯我は我が足幾んど蹶き、我が歩殆ん

うしな われあくしや あんらく み きょうぼう もの ねた けだしかれら し いた くるしみ そのちから
ど失へり、我悪者の安樂を見て、狂妄の者を嫉めり、蓋彼等は死に至るまで苦なく、其力

すこやか かれら ひと くるう あずか ひと とも う ゆえ きょうまん かれら めぐ くびかざり
も健なり、彼等は人の苦勞に與らず、人と偕に撃たれず。故に驕慢は彼等を環ること首飾

ごと きょうぼう かれら まと こころも ごと そのめ そのこ よ い そのおもい こころ うち
の如く、強暴は彼等を纏ふこと衣の如し、其目は其肥えたるに因りて出で、其思は心の中に

さまよ あざけ や あく いた ざんげん し たか い そのくち てん あ そのした ち おうらい
徨ふ、嘲りて息めず、悪を懐きて讒言を敷き、高ぶりて言ふ、其口を天に騰げ、其舌は地に往來

ゆえ しゅ たみ かしこ むか み うつわ みず の い かみ いか し しじょうしや
す。故に主の民も彼處に向ひ、満ちたる器より水を飲みて云ふ、神は如何にして知らん、至上者

し りん ことあるか。視よ、此の悪者は斯の世に安樂して、其財を増す。我は謂えり、我豈に徒

に我が心を浄め、我が手を無罪の中に盥ひ、毎日傷を受け、毎朝責を被りしに非ずや。然れ

ども我若し此くの如く計らんと云はば、我爾の諸子の族の前に罪を得ん。我思へり、如何にし

て之を悟らん、唯是れ我が目の前に難くして、我が神の聖所に入りて、彼等の終を悟るに迨べ

り。然り、爾彼等を滑なる途に立てて、彼等を淵に陥る。何ぞ彼等は遽に壊れ、消え、懼

に依りて滅びたる。夢の覺むるが如く、主よ、爾彼等を覺まして、其想像を消さん。我が心の

沸き、我が中情の裂くる時、我無知にして悟るなく、畜の如く爾の前に在りき。然れども我

は常に爾と偕にし、爾は我が右の手を執る、爾の訓諭にて我を導き、後我を光榮に納れん。

天には我に誰かある、地にも爾と偕にせば願ふ所なし。我が身と我が心とは弱れり、神は我が

心の固なり、世々に我の分なり。蓋視よ、爾に遠ざかる者は亡び、凡そ爾に離るる者は爾

之を滅す。我に在りては神に近づくは善し。我主神に我が恃を負わせたり、爾悉くの行爲

をシオンの女の門の内に傳へん爲なり。

誦經 光榮は父と子と聖神に歸す。

誦經者の「光榮は」に続いて

今も何時も世々にアミン アリルイヤ、アリルイヤ アリルイヤ

3回

神よ光榮はなんじに歸す 主 憐れめ 主憐れめ主憐れめよ、

誦經者の「今も」に続く

光榮は父と子と聖神に歸す

誦經 今も何時も世々に、「アミン」。

第3段 第74、75、76聖詠

神よ、我等爾を讚榮し、爾を讚榮す、蓋爾の名は近し、爾の奇跡は之を示す。○我時を擇

びて、義を以て審判を行はん。地と此に居る者と皆撼く、我其柱を堅固にせん。○我無智の者

い むち おこな なか あくしや い つの あ なか たか なんじ つの あ なか かたくな かみ
に謂う、無智を行ふ母れ、悪者に謂ふ、角を擧ぐる母れ、高く爾の角を擧ぐる母れ、頑に神

こと い なか けだしたか ひがし よ あら にし よ あら こうや よ あら すなわちかみ
の事を言ふ母れ、蓋高くするは東に由るに非ず、西に由るに非ず、曠野に由るに非ず、乃神

しんぼんしや かれ ひく これ のぼ けだしやく しゅ て あ まじり さけ そのうち わ かれ
は審判者にして、彼を卑くし、此を升す。蓋爵は主の手に在り、混ある酒は其内に沸き、彼

これ く ち ことごと あくしや そのかす しぼ これ の ただわれなが つた かみ
は之より酌む、地の悉くの悪者は其滓をも搾りて之を飲まん。唯我永く傳えて、イアコフの神

うた ほ あくしや つの われことごと これ お ぎしや つの あ
を歌ひ頌めん、悪者の角は我悉く之を折らん、義者の角は擧げられん。

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

「アイルイヤ」「アイルイヤ」「アイルイヤ」、神よ、光榮は爾に歸す。三次

しゅあわれ
主 憐めよ。三次

<続けてセダレン>

齋1 三歌齋經 [第1週火曜日] セダレン 第二の調

いととうと ものいみ おんちよう いた さんび けだし これ よ えい せきばん しる
最尊き齋の恩寵は至りて讚美たり。蓋モイセイは之に因りて榮せられて、石版に録さ

ほう う ようしょう どうじ ひ つよ もの あらわ ゆえ われら これ もつ にくたい も
れし法を受け、幼少なる童子は火よりも強き者と顯れたり。故に我等此を以て肉體の燃ゆ

よく け きゅうせいしゅ よ われら しゅうじん かいがい たま
る慾を滅して、ハリストス救世主に呼ばん、我等衆人に悔改を賜ひて、「ゲンナ」を脱

れしめ給へ。

こうえい ちち こ せいしん き
光榮は父と子と聖神に歸す、同調

つうかい ときいた ああ わ たましい せつせい み あらわ さき つうかい もの め そそ
痛悔の時至れり、嗚呼我が靈よ、節制の果を顯せ、前に痛悔せし者に目を注ぎて、ハリ

よ われつみ おか じんじ しゅさい ひとりあわれみおお もの ちゅうしん たんそく ぜいり
ストスに呼べ、我罪を犯せり、仁慈なる主宰、獨憐多き者よ、中心より歎息せし税吏を

すく ごと われ すく たま
救ひしが如く、我を救ひ給へ。

いま いつ よよ
今も何時も世世に、「アミン」。

生神女讚詞

「ハリストティアニン」等の熱心なる轉達・生神・童貞女よ、常に爾の子に祈りて、我等が
爾の祈禱を以て、其仁慈の恩澤に依りて、仇敵の悉くの悪行と悪謀より救はれて、犯し
し罪の赦を賜はらんことを得しめ給へ。

<戻る。枠 P12、 50 聖詠>

斎2 【三歌經の規程】 カノン 讚詞及び「イルモス」は聖イオシフ及び聖フェオドルの作

第二歌頌、預言者モイセイの歌句、申命記三十二章一至四十三節。

右誦經句、天よ、耳を傾けよ、我語らん、地よ、我が口の言を聽け。

左誦經句、我が教は雨の如く注ぎ、我が言は露の如く滴り、微雨の嫩草の上に降るが如く、

細雨の青草の上に降るが如くならん。

右 句、我主の名を讚榮せん、威嚴を我等の神に歸せよ。

左 句、神は全能なり、其工は完全なり、其悉くの道は公義なり。

右 句、神は誠實なり、其中に不義なし、主は義なり、聖なり。

左 句、見よ、見よ、我は我なり、我の外に神なし。

右 句、我は殺し、又生かす、我は撃ち、又痊す、我的手より脱れしむる者なし。

トロパリ 左 讚詞、見よ、見よ、我はイスライリの民を海に救ひ、野に飽かしめ、人人の爲に水を石

より出しし者なり、昔敗亡に陥りし者を懷きて、言ひ難き慈憐に因りて我に就かしめん爲
なり。

右 句、我等の神よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す。

左讃詞、^{たましい}靈よ、^{ねわり}さ^{けいせい}懺醒し、^{たんそく}歎息し、^{りゅうてい}流涕し、^{ものいみ}齋を以て^{もつ}罪の^{つみ}重負を^{おもに}悉く^{ことごと}卸し、^{おろ}熱心

^{つうかい}の^{もつ}痛悔を以て^ひ火を^さ避け、^{こくきゆう}哭泣を以て^{もつ}諸慾の^{しよよく}憂ふべき^{うれ}衣を^{ころも}裂きて、^き神聖なる^{しんせい}衣裳を^{いしやう}受けよ。^う

右 句、我等の神よ、^{われら}光榮は^{かみ}爾に^{こうえい}歸す、^{なんじ}光榮は^き爾に^{こうえい}歸す、^{なんじ}

左讃詞、我等皆^{われら}齋を以て^{みなものいみ}善行の^{もつ}山に^{ぜんこう}近づき、^{やま}逸樂の^{ちか}地上の^{いつらく}圍を^{ちじやう}脱して、^{かこみ}貴き^{だつ}異象の^{とと}昏黒に

^い入り、^{しんせい}神聖なる^{じやうしやう}上升を以て^{もつ}奥密に^{おうみつ}聖に^{せい}せられて、^{あい}ハリストスの^{ゆいいち}愛すべき^{びれい}唯一の^み美麗を^み觀ん。

右 句、我等の神よ、^{われら}光榮は^{かみ}爾に^{こうえい}歸す、^{なんじ}光榮は^き爾に^{こうえい}歸す、^{なんじ}

左讃詞、嗚呼我如何にならんか、^{ああ}罪を行ひて^{われ}主宰を^{いかに}畏れず、^{つみ}良心を^{おこな}失ひし^{しゆさい}者は^{おそ}何を^{りやうしん}爲さん

^かか、^{ゆえ}故に^{われしんぼん}我審判の前に^{まえ}定罪せられたり。^{ていざい}仁慈にして^{じんじ}義なる^ぎ審判者よ、^{しんぼんしや}我衆人に^{われしゆうじん}超えて^こ爾を^{なんじ}

^{うれ}憂ひしめし^{もの}者を^{ただ}正しきに^{かえ}反らしめて^{すく}救ひ^{たま}給へ。

右 句、至聖なる^{しせい}生神女よ、^{しやうしんじよ}我等を^{われら}救ひ^{すく}給へ。^{たま}

左、生神女讃詞、^{たがえ}耕されざる^ち地、^て手を^{ひら}開きて^{そのしんみやう}其神妙なる^{ちから}力にて^{めぐみ}恵を以て^{もつ}悉く^{ことごと}の^い生ける^{もの}者

^あに^{たま}飽かせ^{ぼんゆう}給ふ^{ようせいしや}萬有の^{しやう}養成者を^{もの}生ぜし^わ者よ、^{ざいあく}我が^あ罪惡に^{よわ}飽きて^{こころ}弱りたる^{いのち}心を^{かて}生命の^{もつ}糧を以て

^{かた}固め^{たま}給へ。

右 句、我等の神よ、^{われら}光榮は^{かみ}爾に^{こうえい}歸す、^{なんじ}光榮は^き爾に^{こうえい}歸す、^{なんじ}

左讃詞、^{きた}來りて、^{たましい}靈の^{みっしつ}密室に入り、^い主に^{しゆ}祈禱を^{きとう}獻じて^{けん}呼ばん、^よ天に^{てん}在す^{いま}我等の^{われら}父よ、^{ちち}我が^わ債

^とを^{これ}釋きて^{ゆる}之を^{たま}赦し^{なんじひとり}給へ、^{じれん}爾獨^{じれん}慈憐なればなり。

右 句、我等の神よ、^{われら}光榮は^{かみ}爾に^{こうえい}歸す、^{なんじ}光榮は^き爾に^{こうえい}歸す、^{なんじ}

左讃詞、^{ものいみ}齋の時^{とき}我が^{たましい}靈の^{さわやか}清爽なるを^{あらわ}顯して、^{てきい}適意の^ひ日の^{へん}變じたるを^{うれ}憂ふる^{なか}母れ、^{けだし}蓋^{われら}我等

^{ため}の^{けいけん}爲に^{おさ}敬虔を^{とき}修むる^{かがや}時は^{かがや}輝けり。

右 句、^{こうえい}光榮は^{ちち}父と^こ子と^{せいしん}聖神に^き歸す。

聖三者讃詞、

左、^{むげん}無原にして^{つく}造られざる^{さんい}三位の^{ゆいいちしゃ}惟一者、^{しゅさい}主宰、^{ばんせい}萬世の^{おう}王よ、^{てんし}天使の^{むれ}群と^{ことごと}悉くの^{ひと}人の
^{せい}性とは^{なんじちち}爾父と^こ子と^{せいしん}聖神を^{さんえい}讃榮す。

右 句、^{いま}今も^{いつ}何時も^{よよ}世世に、「アミン」。

生神女讃詞、

左、^{どうていじょ}童貞女よ、^{われら}我等^{なんじわ}爾我が^{やから}族の^{ばんとく}萬徳の^{こうえい}光榮なる^{もの}者を^{うた}歌ふ、^{けだし}蓋我等は^{われら}爾に^{なんじ}依りて^よ神の
^{せい}性に^{あずか}與るを^え得たり、^{なんじ}爾我等の^{ため}爲に^{きゆうせいしゅおよ}救世主及び^{かみ}神ハリストス、^{われら}我等を^{のろい}詛より^と釋きし^{もの}者を
^う生みたればなり。

右 句、^{われら}我等の^{かみ}神よ、^{こうえい}光榮は^{なんじ}爾に^き歸す、^{こうえい}光榮は^{なんじ}爾に^き歸す。

左讃詞、^{たれ}誰か^ひ火を^け滅し、^{たれ}誰か^{もうじゅう}猛獸の^{くち}口を^{ふさ}塞ぎたる、^{もの}齋即^{ものいみすなわちしょうしや}少者を^{いろり}爐より^{たす}助け、^{よげんしや}預言者ダ
ニイルを^{しし}獅の^{くち}口より^{たす}助けたる^{もの}者なり、^{われら}我等兄弟も^{けいてい}善く^よ之を^{これ}遇せん。

(詠) [イルモス]見よ、見よ、我は神、己の旨を以て肉体を衣たる者なり、蛇の誘に依り罪に陥り シア
ダムを救わん為なり。

第2歌頌

見よ 見よ われは か み おのれの旨を
以 て 肉体を着たるものなり
蛇の誘いによつて アダムを救わんため なり

【小連禱】

我等復又安和にして主に禱らん。 (詠) 主憐めよ。

神よ、爾の恩寵を以て我等を助け救ひ憐み護れよ。 (詠) 主憐めよ。

至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰・生神女・永貞童女マリヤと、諸聖人とを記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、并に悉くの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん。

(詠) 主爾に

司祭高聲 蓋權柄及び國と權能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に。(詠) 「アミン」



第八歌頌 三少者の歌句、ダニイル 3 章 57 至 88 節

右誦經句 ^{しゅ ことごと ぞうぶつ しゅ あが ほ かれ うた よよ ほめ あ} 主の 悉 くの造物は主を崇め讚めよ、彼を歌ひて世世に讚め揚げよ。

左誦經句 ^{しゅ しょてんし しゅ しょてん しゅ あが ほ かれ うた よよ ほめ あ} 主の諸天使、主の諸天は主を崇め讚めよ、彼を歌ひて世世に讚め揚げよ。

右 句 ^{しょてん うえ あ みず しゅ ばんぐん しゅ あが ほ かれ うた よよ ほめ あ} 諸天の上に在る水、主の萬軍は主を崇め讚めよ、彼を歌ひて世世に讚め揚げよ。

左 句 ^{ひ つき てん ほし しゅ あが ほ かれ うた よよ ほめ あ} 日と月と、天の星は主を崇め讚めよ、彼を歌ひて世世に讚め揚げよ。

右 句 ^{てん もろもろ とり やじゅう いっさい かちく しゅ あが ほ かれ うた よよ ほめ あ} 天の 諸 の鳥、野獸と一切の家畜と主を崇め讚めよ、彼を歌ひて世世に讚め揚げよ。

左讚詞 ^{たましい はなはだ おこたり ねむり しりぞ ねっしん しんせい いましめ ため けいせい はなむこ} 靈 よ、甚 しき怠惰の眠を斥け、熱心にして神聖なる 誠 の爲に儆醒せよ。新郎

^{ちか ともしび たづさ もの いそ これ むか} は近づく、燈 を攜ふる者として、急ぎて之を迎へよ。

右 句 ^{ひと しょし しゅ あが ほ みんな しゅ あが ほ かれ うた よよ ほめ あ} 人の諸子は主を崇め讚めよ、イズライリ民は主を崇め讚めよ、彼を歌ひて世世に讚め揚げよ。

左讚詞 ^{こうおん ことば われいつらく つるぎ はなはだ きず もの なんじ じれん しんだん} 宏恩なる言よ、我逸樂の劔にて 甚 しく傷つけられたる者を爾が慈憐なる審斷の

^{やくざい いや たま わ かんしゃ こころ いだ よよ なんじ さんえい ため} 藥劑にて醫し給へ、我が感謝の心を抱きて世世に爾を讚榮せん爲なり。

右 句 ^{しゅ しさい ら しゅ しょぼく しゅ あが ほ かれ うた よよ ほめ あ} 主の司祭等、主の諸僕は主を崇め讚めよ、彼を歌ひて世世に讚め揚げよ。

左讃詞 霊よ、有害なる諸慾より、猜忌、憎悪。凡の悪心より己を節制して、無形に天上

の糧を備ふる食を食へ。

右 句 諸神と諸聖人の霊と、諸義人と心の謙卑なる者と主を崇め讃めよ、彼を歌ひて

世世に讃め揚げよ。

左生神女讃詞、潔き神の母よ、我が霊の傷、心の慾、智慧の迷を醫し給へ、爾は獨罪

ある者の扶助者、攻めらるる者の牆なればなり。

右 句 アナニヤ、アザリヤ、ミサイルは主を崇め讃めよ、彼を歌ひて世世に讃め揚げよ。

左讃詞 我等皆節制を以て霊に翼を備えて、天に於いて、能く受けらるる祈禱を主に奉らん。

右 句、主の諸使徒、預言者、致命者は主を崇め讃めよ、彼を歌ひて世世に讃め揚げよ。

左讃詞、我等傷感の神を得て、霊の贖罪の爲に泣きて、ハリストスを世世に讃め歌はん。

右 句、我等主なる父と子と聖神とを崇め讃めん。

聖三者讃詞、

左、一性なる三者、造られざる惟一者、萬有の神よ、我等爾を萬世に尊み崇めん。

右句、今も何時も世世に、「アミン」。

生神女讃詞、

左、至浄なる者よ、爾を讃め歌ふ者の爲に祈禱を爲して彼等をも諸の誘惑及び災難よ

り救ひ給へ。

右 句、我等の神よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す。

左讃詞、富める者の食を厭ひて、來りてラザリと偕に齋せん、アウラアムの懐が我等を

も ^{あたた}温め ^{ため}ん爲なり。

詠隊歌ふ、我等主を讃め、崇め、伏し拜みて、世々に歌ひ讃めん。

「イルモス」、

萬物の造成主、諸天使の畏るる者を、人人よ、歌ひて萬世に讃め揚げよ。

(詠) 我等主を讃め、崇め、伏し拜みて、世々に歌ひ讃めん。

[イルモス] 萬物の造成主、諸天使の畏るる者を、人々よ、歌いて、萬世に崇め讃めよ。

テノリ歌人唄

我等 神を 崇め讃め 伏し拜みて 世々に うたい 讃めん
萬 ぶつの 造 成 主 諸 天 使 の お そ る る も の を
ひとびと よ う たい て 萬 世 に あ が め ほ め よ

第8歌頌のイルモスの後

司祭 生神女光の母を ^{ほめうた}讃歌を以て讃め揚げん。

(詠) [ヘルビムの歌]

我が心は主を崇め、我が ^{たましい}靈は神我が救主を悦ぶ。

附唱 ヘルビムより尊く、セラフィムに並びなく榮え、^{みさお}貞操を破らずして ^{かみことば}神言を生みし、実の生神女たる爾を崇め讃む。

第1句

我が心は主を あがめ 我が靈は神我が救主を 喜こーぶ

附唱

ヘルビムより 尊とく セラフィムに並びなく さかえ 貞操を
破らずして神言を生みし 実の生神女たる 爾をあがめ讃む

第2句 その婢の卑しきを顧み給へり、今より萬世我を福なりと言はん、

→ヘルビムより尊く

第3句 権能を持ち給へるものは、我が為に大なる事を為せり、其の名は聖なり、其の憐れみは世世 彼を畏るる者に臨まん

→ヘルビムより尊く

第4句 其の肘の力を表して、心の驕れるものを散らし給へり、

→ヘルビムより尊く

第5句 権ある者を位より斥け、卑しき者を上げ、飢うる者を善に飽かせ、富める者をむなしく帰らせ給へり。

→ヘルビムより尊く

第6句 其の僕、イスライリを納れて、我が先祖に告げしが如く、アウラアムと其の裔を世世に憐れむ事を記憶し給へり、

→ヘルビムより尊く

<続いて第9歌頌へ>

第九歌頌 聖ザハリヤの歌句、ルカ一章六十八至七十九節。

右誦經句、祝讚せらるる哉主、イスライリの神、蓋其民を眷みて、之に贖を爲し、

左誦經句、我等の爲に救の角を其僕ダウィドの家に興せり、

右句、古世より其聖なる預言者の口を以て言ひしが如し、

左句、即我等を我が諸敵及び凡そ我等を悪む者の手より救ひ、

右句、以て矜恤を我が先祖に施し、其聖なる約、即我が祖アウラアムに矢ひたる誓を

記念せん、

左讚詞、地上の者の中誰か何時か斯く躓きて、何時か神を怒らせたる、誰か我不當の者の若く

悪の進に従ひて罪の住所と爲りたる。然れども慈憐の希望者たる神よ、爾我を憐み給へ。

右句 謂ふ、我等に我が諸敵の手より救はれし後、懼なく、彼の前に在りて、聖を以て義

を以て、生涯彼に事へしめんと。

左讚詞 神を見る諸天使の軍よ、和げ易き神に祈りて、生命の逸樂の淵と諸慾の激浪とに漾

はされ、仇敵の諸神の攻撃に悩まさるる靈を救はんことを求め給へ。

右 句 子よ、爾も至上者の預言者と稱へられん、蓋主の面前に行きて、其道を備へん。

左讃詞、靈よ、來れ、齋の徳の翼に軽くせられて、下に引く所の悪より起ち、信を以て

神を見る者と爲りて、至りて光明なる異象、諸徳の糧を備ふる者を樂め。

右 句 彼の民に、其救は即諸罪の赦にして、我が神の矜恤に因ることを知らしめん。

左生神女讃詞、潔き者よ、誰か宜しきに適ひて爾を讚美するを得ん、蓋爾は讚美たる主宰、

天軍の諸長が讚頌する主を測り難く生めり。婚姻を知らざる童貞女よ、罪を犯しし人人の

爲に彼に禱り給へ。

右 句 此の矜恤に因りて、東旭は上より我等に臨めり。

左讃詞、兄弟よ、今は嘉く納るべき時、今は救の日なり、此の日に於て我等諸徳の獻物を神

に奉り、昏昧の行を除きて光明の甲を衣るべし、パウエルの呼ぶ所の如し。

右 句 幽暗と死の蔭とに坐する者を照し、我等の足を平安の道に向はしめん爲なり。

左讃詞、來りて、主が齋を以て敵を殺しし如く、我等も此を以て其矢を折り、其悪謀を破ら

ん。彼が我等を誘はんと欲する時、各人サタナ我より退けと云ふべし。

右 句 光榮は父と子と聖神に歸す、

聖三者讃詞、

左、無原なる尊き三者、生命の源たる分れざる惟一者、生れざる父、生れたる言、

又子、及び聖神よ、我等爾の一性を讚頌す、爾を歌ふ者を救ひ給へ。

右 句、今も何時も世に、「アミン」。

生神女讃詞、

左、神の母よ、爾の産は測り難し、蓋爾の受胎は夫に由らず、爾は童貞女として生

めり、^{うま}生れたる^{もの}者は^{かみ}神なればなり。我等^{われら}彼^{かれ}を^{とうと}尊^{あが}み崇めて、^{なんじ}爾^{どうていじよ}童貞女^ほを^あ讃め揚ぐる。

右 句、我等^{われら}の^{かみ}神よ、^{こうえい}光榮は^{なんじ}爾に^き歸す、^{こうえい}光榮は^{なんじ}爾に^き歸す。

左讃詞、^{ものいみ}齋^{もつ}を^{きとう}以て^{やま}祈^つ禱の^{われら}山に^{いさぎよ}就^{こころ}きて、我等^{かみ}も^み潔^{ごと}き^{いましめ}心にて^い神を見、^いモイセイの^い如く、^い誠

の^ひ碑^{うち}を^う哀^{かみ}に^{あい}受^{かんばせ}けて、^よ神の^い愛^いの^い顔^いに^い由^いりて、^い光^い榮^いを^い以^いて^い輝^いか^いされん。

(詠) 【イルモス】イサイヤ祝えよ、童貞女は孕みて、子エムマヌイル、神及び人なる者を生めり、其名は東、我等彼を崇めて、童貞女を讃め揚ぐる。

第9歌頌



<戻る。枠のP15「常に福」へ>

斎3 ^{くづけ}【挿句のスティヒラ】第三の調。

<本来は第1句を二次>

句) ^{しゅ}主よ、^{つと}夙に^{なんじ}爾の^{あわれみ}憐^{もつ}を^{われら}以て^あ我等に^{しか}飽^{われら}かしめよ、^{しょうがいよろこ}然せば^{たの}我等^{なんじ}生涯^い歡^いび^い樂^いしまん。爾

^{われら}我等を^う撲^ひちし日、^{われら}我等が^{わがわい}禍^あに^{とし}遭^かひし年^{われら}に^{たの}代^{たま}へて、^{ねが}我等^{なんじ}を^い樂^いしましめ^い給^いへ。願^いは^いく^いは^い爾^いの

^{わざ}工作^{なんじ}は^い爾^いの^い諸^い僕^いに^い著^いれ、^い爾^いの^い光^い榮^いは^い其^い諸^い子^いに^い著^いれん。

ひとびと たましい すくい むてん ものいみ はじ おそれ もつ しゅ つと ぜんこう あぶら もつ こうべ
 人人よ、靈の救たる無玷の齋を始めん、畏を以て主に勤めん、善行の膏を以て首に
 め けつじょう みず もつ おもて あら きとう うち むだごと い おし ごと か よ
 傳らん、潔淨の水を以て面を洗はん、祈祷の中に贅語を言はずして、教へられし如く斯く呼
 ばん、天に在す我等の父よ、我等の罪過を我等に免し給へ、爾は人を愛する主なればなり。
 句) ねが しゅ わ かみ めぐみ われら あ ねが わ て わざ われら たす たま
 願はくは主吾が神の恵は我等に在らん、願はくは我が手の工作を我等に助け給へ、
 わ て わざ たす たま
 我が手の工作を助け給へ。

致命者讃詞、

ぐんし ら しょう ぼうぎやくしゃ おそれ しりぞ かんい もつ ゆうき もつ かれ ばんゆう
 ハリストスの軍士等は諸王と暴虐者との畏懼を退けて、敢爲を以て勇毅を以て、彼を萬有
 しゅ かみおよ われら おう う と いま われら たましい ため いの
 の主、神及び我等の王として承け認めて、今我等の靈の爲に祈る。
 こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ
 光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

生神女讃詞

しょうしんじょ およ なんじ いの もの てんたつ われら なんじ よ いさ なんじ もつ ほこ わ ことごと
 生神女、凡そ爾に祈る者の轉達よ、我等爾に因りて勇み、爾を以て誇る、我が悉くの
 たのみ なんじ あ なんじ うま もの なんじ ふとう しょぼく ため いの たま
 侍は爾に在り。爾より生れし者に爾の不當なる諸僕の爲に祈り給へ。

◀→戻る。☐ P19「至上者よ」へ▶

六時課

齋4

【預言のトロパリ】第一の調

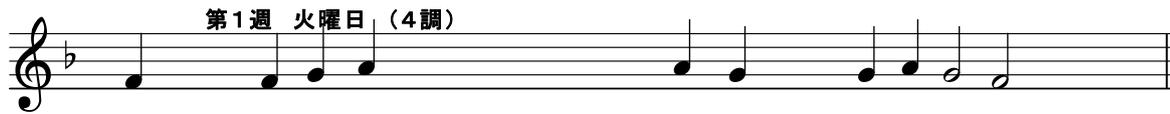
われら ち あ わ れつそ ごと たびびと よ わ きゅうせいしゅ われら いのち みじか
 我等は地に在りて我が列祖の如く羈客なるに因りて、我が救世主よ、我等の生命の短きを
 つみ まも ひと あい しゅ よ われら あわれ たま
 罪なく護り、人を愛する主なるに因りて、我等を憐み給へ。

司祭 謹みて聴くべし。

誦經 ポロキメン、 第四の調 (第五聖詠)

我が王、我が神よ、我が呼ぶ声を聴き納れ給え。

(句) 主我が言を聴き、我が思を悟り給え。



我が王 我が 神や、 我が呼ぶ声を 聴きいれたまえ

司祭 睿智。

誦經 イサイヤの預言書の読み。1章19節至2章3節

司祭 謹みて聴くべし。

誦經、主^{しゅ}是^かくの如^{ごと}く言^いふ、爾^{なんじら}等^も若^{うけが}し肯^{したが}ひて順^ちはば、地^ちの善^{よき}物^{もの}を食^{くら}はん、若^もし肯^{うけが}はずして逆^{さから}

はば、劍^{つるぎ}爾^{なんじら}等^かを齧^かまん、蓋^{けだし}主^{しゅ}の口^{くち}之^{これ}を言^いふ。忠^{ちゅう}信^{しん}の城^{まち}邑^{ぎはん}、義^み判^{もの}の充^いちたる者^{いか}は、如何^{いかに}

して淫^{いん}婦^ぶとは爲^なりたる、義^ぎ其^{その}中^{うち}に居^おりしが、今^{いま}は殺^{ひと}人^{ごろし}者^お居^{なんじ}るなり。爾^{ぎん}の銀^{かな}は渣^な滓^{なんじ}と爲^なり、爾^{なんじ}

の酒^{さけ}は水^{みず}を雜^{まじ}ふ、爾^{なんじ}の諸^{しよ}侯^{こう}は法^{ほう}を壞^{やぶ}る者^{もの}と爲^なり、盜^{とう}賊^{ぞく}の黨^{くみ}と爲^なり、彼^{かれ}等^ら皆^{みな}賄^まい路^いを喜^{よろこ}び苞^{おくり}苴^{もの}

を追^おひ求^{もと}め、孤^{みな}子^{しご}を防^ふぎ護^{まも}らず、嫠^{やもめ}婦^うの訟^うは彼^{かれ}等^らに至^{いた}らず。故^{ゆえ}に主^{しゅ}、萬^{ばん}軍^{ぐん}の主^{しゅ}、イズライ

リの有^{ゆう}能^{のう}者^{しや}云^いく、噫^あ我^あ敵^{てき}に向^{むか}ひて念^{おも}いを散^{はら}し、仇^{あだ}に向^{むか}ひて報^{むく}いを爲^なさん、我^{われ}手^てを舉^あげて爾^{なんじ}に加^{くわ}

へ、灰^{あく}汁^{もつ}を以^{ごと}てするが如^{なんじ}く爾^{きよ}を浄^まめて、混^まぜ物^{もの}を去^さり、爾^{なんじ}の鉛^{なまり}を盡^{ことごと}く除^{のぞ}き、而^{しこう}して又^{また}爾^{なんじ}

の審^さ士^ばを舊^{もと}の如^{ごと}く、爾^{なんじ}の議^ぎ官^{かん}を初^{はじめ}の如^{ごと}く立^たてん、其^{その}時^{とき}爾^{なんじ}は義^ぎの邑^{まち}、忠^{ちゅう}信^{しん}の城^{まち}市^{しん}と稱^{とな}へ

られん。シオンは義^{ぎはん}判^{もつ}を以^{すく}て救^{そのてん}はれ、其^{しよ}轉^ぎじたる諸^{もつ}子^{すく}は義^{しか}を以^{はんぎやく}て救^はられん。然^{しか}れども反^{はん}逆^{ぎやく}の

者^{もの}と罪^{ざい}人^{にん}とは皆^{みな}壞^{やぶ}られ、主^{しゅ}を棄^すてたる者^{もの}は滅^{ほろ}されん。彼^{かれ}等^らは斯^かく爾^{なんじら}等^らの慕^{した}へる橡^{かし}の森^{もり}に縁^より

て羞^はを得^え、爾^{なんじら}等^らの擇^{えら}びたる園^{その}に縁^よりて辱^{はず}しめられん、蓋^{けだし}爾^{なんじら}等^らは葉^はの落^おちたる橡^{かし}の樹^きの如^{ごと}

く、水^{みず}なき園^{その}の如^{ごと}くならん。強^{つよ}き者^{もの}は麻^あ縷^{さく}の如^{ごと}く、其^{その}工^{わざ}作^ひは火^ひ花^{ばな}の如^{ごと}くなり、共^{とも}に燃^もえて、

之^{これ}を滅^けす者^{もの}なからん。アモスの子^こイサイヤに異^い象^{しょう}の中^{うち}に示^{しめ}されし言^{ことば}、イウデヤとイエルサ

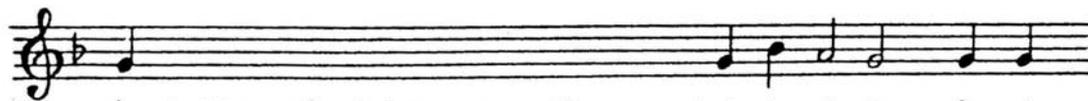
リムトの事^{こと}なり。末^{すえ}の日^ひに、主^{しゅ}の山^{やま}及^おび神^{かみ}の家^{いえ}は諸^{しよ}山^{ざん}の峰^{みね}に顯^{あら}れて、諸^{もろ}の陵^おより高^{たか}く舉^あげ

られ、萬^{ばん}民^{みん}流^{なが}るる如^{ごと}く之^{これ}に歸^きせん。多^おくの民^{たみ}は往^ゆきて言^いはん、來^{きた}りて、主^{しゅ}の山^{やま}に登^{のぼ}り、イヤ

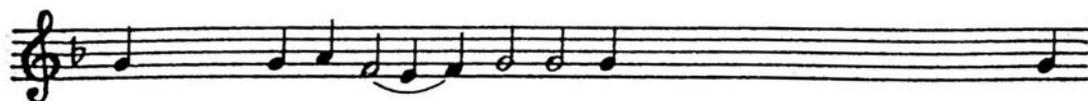
かみ いえ い かれ われら そのみち おし われら そのあと したが
 コフの神の家に入らん、彼我等に其途を教へん、我等其後に従はん。

晩 課

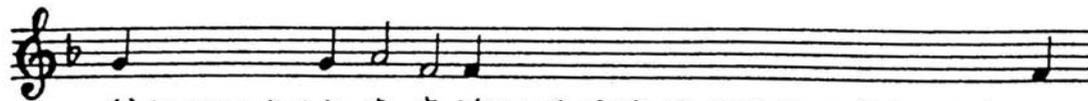
齋 5 【主よ、爾によぶの讚頌】^{ステヒラ} 第二の調



主や汝に呼ぶすみやかに我れにいたりたまえ 主や



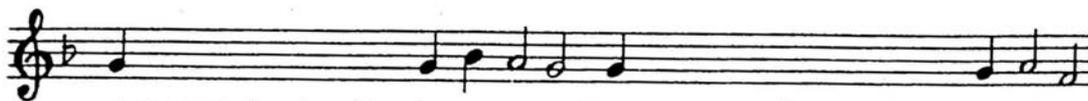
我れに聞きたま え主やなんじに呼ぶすみやかに



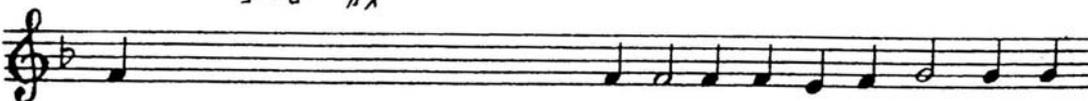
我れにいたりたまえ汝に呼ぶ時我が祈りの声をいれた



ま え主やわれにききたま えねがわくは我が



いのりは香炉ユーロの香りのごとく汝がかんばせの前にのぼりカオ



我が手をあぐるはくれの祭のごとくいれられん主や



われにききたま え

誦経 しゅ わ くち まもり お わ くちびる もん ふせ たま わ こころ よこしま
 主よ、我が口に衛を置き、我が唇の門を扞ぎ給へ、我が心に邪なる

ことば かたぶ ふほう おこな ひと とも つみ いいわけ なか
 言に傾きて、不法を行ふ人と共に罪の推諉せしむる母れ。

わ こえ もつ しゅ よ わ こえ もつ しゅ いの わ いのり そのまえ そそ わ うれい
 我が聲を以て主に籲び、我が聲を以て主に禱り、我が禱を其前に注ぎ、我が憂を

そのまえ あらわ わ たましいわれ うち よわ とき なんじ われ みち し わ ゆ みち
其前に 顯 せり。我が 靈 我の衷に弱りし時、爾は我の途を知れり、我が行く路

おい かれら ひそか わ たため あみ もう われみぎ め そそ ひとり われ みと
に於て、彼等は 竊 に我が爲に網を設けたり。我右に目を注ぐに、一人も我を認むる

もの われ のが ところ わ たましい かえりみ もの しゅ われなんじ よ い
者なし、我に遁るる所なく、我が 靈 を 顧 る者なし。主よ、我 爾 に呼びて云へ

なんじ われ かくれが い もの ち おい われ ぶん わ よ き たま われ
り、爾は我の避所なり、生ける者の地に於て我の分なり。我が籲ぶを聴き給へ、我

はなはだわ われ はくがい もの すく たま かれら われ つよ
甚 弱りたればなり、我を迫害する者より救ひ給へ、彼等は我より強ければなり。

わ たましい ひとや ひ いだ われ なんじ な さんえい たま
我が 靈 を 獄 より引き出して、我に 爾 の名を讃榮せしめ給へ。

句) しゅ も なんじ ふほう ただ しゅ たれ よ た しか なんじ ゆるし ひと なんじ
主よ、若し 爾 不法を糾さば、主よ、孰か能く立たん。然れども 爾 に赦あり、人に 爾

のまえ つつし ため
の前に 敬 まん爲なり。

われら わかしにが しょく よ らくえん いだ もの しょよく せつせい もつ これ い つと
我等昔 苦き 食 に因りて樂園より出されし者は、諸慾の節制を以て之に入らんことを務め

て、我が神に呼ばん、 爾 の手を十字架に伸べ、醋を飲み、膽を嘗め、釘に由る苦痛を忍び

て、我等の 靈 より至りて苦き逸樂を 悉 く釘うち出しし者よ、慈憐の多きに因りて、爾の

しょよく すく たま
諸僕を救ひ給へ。

句) われしゅ のぞ わ たましいしゅ のぞ われかれ ことば たの
我主を望み、我が 靈 主を望み、我彼の 言 を恃む。

いた じれん もの われら わかしき しょく よ らくえん いだ もの なんじ じゅうじか よ
至りて慈憐なる者よ、我等昔 木の 食 に因りて樂園より出されし者は、爾の十字架に因り

て之に入るを得たり。故に我等祈祷の中に十字架を擧げて、皆 中心より 爾 に祈る、今節制

の時に於て我等に 涙 の流、我等の諸慾と罪過との 汚 を 悉 く浄むる者を遣し給へ、我等

みなねっしん しゅ こうえい なんじ き よ ため
皆熱心に、主よ、光榮は 爾 に歸すと呼ばん爲なり。

句) わ たましいしゅ ま ぼんにん あさ ま ぼんにん あさ ま はなはだ
我が 靈 主を待つこと、番人の旦を待ち、番人の旦を待つより 甚 し。

ことば わかし らくえん たま ごと われ せつせい かんらく あた たま わ かみ わ およ
言よ、昔 アダムに樂園を賜ひし如く、我にも節制の歡樂を與へ給へ、我が神よ、我が凡そ

なんじ いましめ くら なんじ きん くだもの つみ おのれ せい よろこび もつ なんじ いのち ほどこ
爾の誠より食ひ、爾が禁ぜし果たる罪より己を制して、喜を以て爾が生命を施す

じゅうじか くるしみ むか ため
十字架の苦を迎へん爲なり。

＜その週の調で生神女讃詞を歌う。大斎第1週奉事式略ではすべて1調で代用＞

【聖入なし】 誦経で

せい ふく じょうせい てん ちち せい こうえい おだや ひかり
聖にして福たる常生なる、天の父の聖なる光榮の穩かなる光 イイスス・ハリス

われらひ いり いた くれ ひかり み かみちち こ せいしん うた いのち たま かみ
トスや、我等日の入に至り、晩の光を見て、神父と子と聖神を歌ふ。生命を賜ふ神

こ なんじ いつ けいけん こえ うた ゆえ せかい なんじ あが ほ
の子や、爾は何時も敬虔の聲にて歌はるべし、故に世界は爾を崇め讃む。

齋6【ポロキメン】

誦経 ポロキメン、第六の調。 第七聖詠、

1. 主我が神よ、我爾を頼む、我を救い給へ。(6調)

(句) 悉くの^{きんちく}蒼邃者より我を援け給へ。



主我が神よ、我爾をたのむ 我をすくいたまえ

輔祭 睿智。

誦経 創世記の読み。1章14至23節

輔祭 謹みて聴くべし。

誦経、^{かみ い}神曰へり、^{てん おおぞら ひかり}天の穹蒼に光明ありて、^{ひる よる わか}晝と夜とを分ち、^{またしるし ため とき ため ひ ため}又天象の爲、時節の爲、日の爲、

^{とし ため な}年の爲に成るべし、^{またてん おおぞら あ}又天の穹蒼に在りて地を照す光と爲るべし。即斯く成れり。神二つ

^{おおい ひかり つく おおい ひかり ひる つかさど}の巨なる光を造り、^{ちいさ ひかり よる つかさど}大なる光に晝を司らしめ、^{またほし つく}小き光に夜を司らしめ、又星を造

^{かみこれ てん おおぞら お}れり。神之を天の穹蒼に置いて、^{ち てら ひかり な}地を照さしめ、^{ひる よ つかさど}晝と夜とを司らしめ、^{ひかり やみ わか}光と暗とを分たし

^{かみ これ み よし}めたり、神、之を觀て善とせり。^{ゆう あさ こ だいしじつ}夕あり、朝あり、是れ第四日なり。神曰へり、^{かみ い みず いのち}水は、生命

^{しょうぶつ さん}ある諸動物を産すべし。^{またとり ち うえ てん おおぞら と}又鳥は地の上に、天の穹蒼に飛ぶべし。即斯く成れり。神は巨な

る魚、及び水が其類に從ひて産する所の生命ある諸動物、又諸の飛鳥を其類に從ひて造

れり。神之を觀て善とせり。神之を祝して曰へり、生めよ、殖えよ、海の水に充てよ、又鳥

は地に殖ゆべし。夕あり、朝あり、是れ第五日なり

司祭 謹みて聽くべし。

誦經 ポロキメン、第5の調、

主我が神よ、爾の名は何ぞ全地に大なる。(5調)

(句) 爾の光榮は諸天に超ゆ。



司祭 睿智。

誦經 箴言の読み。1章20至33節

司祭 謹みて聽くべし。

誦經、智慧は街に呼び、其聲を衢に揚げ。大會の處に傳へ、邑の門の口に宣べて云ふ、爾等

拙き者、拙きを愛し、侮る者侮を樂み、愚なる者知識を惡むは何の時に至るか。轉

じて我の譴責を聽け、視よ、我我が神を爾等に注ぎ、我が言を爾等に示さん。我呼びたれ

ども、爾等聽かざりき、我が手を伸べたれども、顧る者なかりき、爾等我が悉くの勸諭

を斥け、我が譴責を受けざりき。此に縁りて我も爾等の滅亡を笑ひ、恐懼が爾等に來らん時

喜ばん、此れ恐懼が颶風の如く爾等に來り、禍患が旋風の如く爾等に至り、憂患と困苦と

が爾等に及ばん時なり。其の時彼等我を呼ぶとも、我聽かざらん、且より我を尋ぬとも、我

に遇わざらん。蓋彼等は知識を惡み、主を畏るる寅畏を擇ばず、我が勸諭を受けず、我が悉

くの譴責を藐じたり。故に彼等は己の途の果を食い、己の策略に飽かん。蓋拙き者の

頑固は彼等を殺し、愚なる者の簡慢は彼等を滅さん。惟我に聽く者は危きことなく、安然

として、^{わざわい} 禍 ^{おそ} を懼れずして ^お 居る ^え を得ん。

← 枠へ戻る P77 >

齋 7 ^{くづけのステヒラ} 【挿句讃頌】 第八の調

< 繰り返し略 >

句) ^{てん} 天に ^お 居る ^{もの} 者よ、^{われめ} 我目を ^あ 擧げて ^{なんじ} 爾 ^{のぞ} を望む。視よ、^み 僕の ^{ぼく} 目 ^め 主人 ^{しゅじん} の手を ^て 望み、^{のぞ} 婢の ^ひ 目 ^め 主婦 ^{しゅふ} の手 ^て を望むが如く、^{われら} 我等の ^め 目は ^{しゅ} 主、^わ 吾が ^{かみ} 神 ^{のぞ} を望みて、^{その} 其 ^{われら} 我等 ^{あわれ} を憐 ^ま むを俟つ。

^{われら} 我等 ^{もの} 齋 ^{もつ} を以て ^{ただしよく} 唯 ^{せい} 食 ^{すなわち} を制 ^{およ} する ^{ぶつたい} のみならず、^{よく} 乃 ^{はな} 凡 ^{もの} そ ^な 物體 ^{われら} の慾 ^{われら} を離 ^{われら} る者 ^{われら} と爲 ^{われら} すべし、我等 ^{われら} を

^{はくがい} 迫害 ^{にくたい} する ^{ふく} 肉體 ^{かみ} を服 ^こ せ ^{こひつじ} して、^{せかい} 神 ^{ため} の子 ^{あま} たる ^{ほふ} 羔 ^{もの} 、^{りょうしよく} 世界 ^{りょうしよく} の爲 ^{りょうしよく} に甘 ^{りょうしよく} んじて ^{りょうしよく} 屠 ^{りょうしよく} られ ^{りょうしよく} し ^{りょうしよく} 者 ^{りょうしよく} を ^{りょうしよく} 領 ^{りょうしよく} 食 ^{りょうしよく} する

^た に任 ^{もの} ぶる ^な 者と ^{ため} 爲 ^{またしよく} らん ^{たか} 爲、^{のぼ} 又 ^{びぜん} 諸 ^{おこない} 徳 ^{こうめい} の高 ^{かんらく} きに ^{おい} 登 ^{ぞくしん} りて、^{ぞくしん} 美 ^{ぞくしん} 善 ^{ぞくしん} なる ^{ぞくしん} 行 ^{ぞくしん} の ^{ぞくしん} 光 ^{ぞくしん} 明 ^{ぞくしん} 歡 ^{ぞくしん} 樂 ^{ぞくしん} に於 ^{ぞくしん} て、^{ぞくしん} 屬 ^{ぞくしん} 神 ^{ぞくしん} に

^{きゅうせいしゅ} 救 ^し 世 ^{ふっかつ} 主 ^{まつ} の死 ^{ひと} より ^{あい} の復 ^{しゅ} 活 ^{たのし} を祭 ^{ため} りて、^{ため} 人 ^{ため} を愛 ^{ため} する ^{ため} 主 ^{ため} を ^{ため} 樂 ^{ため} ま ^{ため} し ^{ため} め ^{ため} ん ^{ため} 爲 ^{ため} なり。

句) ^{しゅ} 主 ^{われら} よ、^{あわれ} 我等 ^{われら} を憐 ^{われら} み、^{われら} 我等 ^{あわれ} を憐 ^{たま} み ^{けだし} 給 ^{われら} へ、^{あなどり} 蓋 ^あ 我等 ^た は ^{われら} 侮 ^{たましい} に ^{おご} 賢 ^{おご} き ^{おご} 足 ^{おご} れ ^{おご} り。我等 ^{おご} の ^{おご} 靈 ^{おご} は ^{おご} 驕 ^{おご} る

^{もの} 者 ^{はずか} の ^{ほこ} 辱 ^{もの} と ^{あなどり} 誇 ^あ る ^た 者 ^た の ^た 侮 ^た と ^た に ^た 賢 ^た き ^た 足 ^た れ ^た り。

致命者讃詞、

^{しゅ} 主 ^{なんじ} よ、^{ちめい} 爾 ^{みらい} の致命 ^{いのち} 者 ^{ため} は ^こ 未 ^よ 來 ^あ の ^あ 生命 ^{わす} の ^{くるしみ} 爲 ^{おも} に ^{その} 此 ^{いのち} の ^{いのち} 世 ^{いのち} に ^{いのち} 在 ^{いのち} る ^{いのち} こと ^{いのち} を ^{いのち} 忘 ^{いのち} れ、^{いのち} 苦 ^{いのち} を ^{いのち} 意 ^{いのち} はず ^{いのち} して ^{いのち} 其 ^{いのち} 生命 ^{いのち} の

^{よつぎ} 嗣 ^な と ^{ゆえ} 爲 ^{てん} れ ^{しら} り、^{とも} 故 ^{よろこ} に ^{かれら} 天 ^{いのり} 使 ^よ 等 ^{なんじ} と ^{たみ} 共 ^{おおい} に ^{あわれみ} 喜 ^{あた} ぶ、^{たま} 彼 ^{たま} 等 ^{たま} の ^{たま} 祈 ^{たま} に ^{たま} 困 ^{たま} り ^{たま} て ^{たま} 爾 ^{たま} の ^{たま} 民 ^{たま} に ^{たま} 大 ^{たま} なる ^{たま} 憐 ^{たま} を ^{たま} 與 ^{たま} へ ^{たま} 給 ^{たま} へ。

^{こうえい} 光 ^{ちち} 榮 ^こ は ^{せいしん} 父 ^き と ^{いま} 子 ^{いつ} と ^{よよ} 聖 ^{よよ} 神 ^{よよ} に ^{よよ} 歸 ^{よよ} す、^{よよ} 今 ^{よよ} も ^{よよ} 何 ^{よよ} 時 ^{よよ} も ^{よよ} 世 ^{よよ} 世 ^{よよ} に、^{よよ} 「ア ^{よよ} ミ ^{よよ} ン」。

十字架生神女讃詞、

^{ああ} 嗚 ^{しえい} 呼 ^{きせき} 至 ^{ああ} 榮 ^{あらた} なる ^{ひみつ} 奇 ^{ああ} 跡 ^{おそ} 、^{くわだて} 嗚 ^{どうてい} 呼 ^{じょ} 新 ^{なんじ} なる ^{やまい} 秘 ^{きい} 密 ^{きい} 、^{きい} 嗚 ^{きい} 呼 ^{きい} 長 ^{きい} る ^{きい} べき ^{きい} 建 ^{きい} 畫 ^{きい} やと、^{きい} 童 ^{きい} 貞 ^{きい} 女 ^{きい} は ^{きい} 爾 ^{きい} 病 ^{きい} なく ^{きい} して ^{きい} 奇 ^{きい} 異 ^{きい}

^う に ^{もの} 生 ^{じゅうじか} み ^{ふたり} た ^{とうぞく} る ^{あいだ} 者 ^{かか} が ^み 十 ^い 字 ^{かつな} 架 ^よ に ^{かなし} 二 ^{かな} 人 ^{かな} の ^{かな} 盜 ^{かな} 賊 ^{かな} の ^{かな} 間 ^{かな} に ^{かな} 懸 ^{かな} り ^{かな} た ^{かな} る ^{かな} を ^{かな} 見 ^{かな} て ^{かな} 云 ^{かな} ひ、^{かな} 且 ^{かな} 泣 ^{かな} き ^{かな} て ^{かな} 呼 ^{かな} べ ^{かな} り、^{かな} 哀 ^{かな} い ^{かな} 哉 ^{かな}

^わ 我 ^{しあい} が ^こ 至 ^{いか} 愛 ^{ざんにん} の ^{おん} 子 ^し よ、^し 如 ^{たみ} 何 ^{なんじ} に ^{じゅうじか} して ^{てい} 殘 ^{てい} 忍 ^{てい} なる ^{てい} 恩 ^{てい} を ^{てい} 知 ^{てい} ら ^{てい} ざる ^{てい} 民 ^{てい} は ^{てい} 爾 ^{てい} を ^{てい} 十 ^{てい} 字 ^{てい} 架 ^{てい} に ^{てい} 釘 ^{てい} した ^{てい} る。

← 枠へ戻る P79 「シメオンの祝文」 >